花よりワイン

小島直記

写真・小島三樹

実業之日本社

著者略歴

大正八年福岡県八女市に生まれる。東京大学経済学部卒業後、海軍に入り、海軍主計大尉で終戦を迎える。戦後、教師、会社員などを経て、昭和四十年、文筆一本の生活に入る。主な著書に『福沢山脈』『小説三井物産』『極道』『小泉三申』『まかり通る』『大過渡期』『東京海上ロンドン支店』『ヨーロッパ旧婚旅行』『出世を急がぬ男たち』など。

花よりワイン
昭和五十八年一月十日　第一刷

著者　小島直記
発行者　増田義和
発行所　株式会社　実業之日本社
東京都中央区銀座一―三―九
電話（編集）五三五―二三〇一
（営業）五三五―四四四一
印刷所　東京研文社
製本所　共文堂

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

©NAOKI KOJIMA 1983　Printed in Japan

花よりワイン

ヨーロッパ還暦旅行

小島直記

実業之日本社

花よりワイン／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

80 72 58 50 39 26 16 8

ブリューゲル　87
カフカの城　104
汽車の旅　118
大帝の誤算　128
雨のチロル　137
うたかたの記　151
ザルツブルク　160
人間模様　168

花よりワイン

還暦旅行

逗子の自宅を出るとき、腰にブラさげた万歩計をゼロにしておいた。それがアンカレッジ空港で、二六九〇歩、ロンドン（ヒースロー）空港で三八三〇歩、ウィーンのホテルの部屋に入ったとき、五八二〇歩となった。さらに、散歩に出て、ウィーン大学前、ブルク劇場裏、市民庭園、旧王宮、ケルントナー大通りまでいってくると、なんと九七二〇歩となっているではないか。

「この分ならば、大分成果があがるぞ」

と私はよろこんだ。

万歩計にこだわる理由をのべるには、四十六歳のとき、ブリヂストンタイヤ会

社をやめてペン一本となった頃のいきさつからはじめねばならない。そのときいろいろな先輩から親切なアドバイスをうけたけれども、十七年たった今、もっとも痛切なのは埴谷雄高さんの言葉である。

「足が弱くなるから、それに気をつけたがいいよ」

といわれた。そこで、午前中に原稿を書くと、午後はかならず、披露山に登ったり、山を越えて葉山まで行ったり、横浜の外人墓地をぶらついたり、ともかく歩くことにした。

それがいつの間にか守れなくなった。特に去年から極端な出不精となってしまった。その原因は、いろいろあるが、要するに老化現象以外の何ものでもあるまい。

午前中二階の書斎で仕事をする。その間何回か階段を上がりおりするだけで、午後は碁敵を自宅に迎え、夕方まで打ち、あとは飲むという毎日。試みに万歩計で測ってみたら、大体一日二〇〇〇歩前後というていたらくであった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「運動不足ですよ」

という忠告をきくまでもなく、これはいかんとおもって、講演を引きうけてみることにした。私は八女中学、福岡高校（旧制）時代に弁論部にいたので、話すことは苦にならない。あの頃の言論統制のきびしさ――というよりも、演壇の真下で自分の話を記録していた特高のおそろしかったことをおもうと、何をしゃべってもよいという今日は天国みたいだ。それに運動不足の解消にもなるし、ゼニもかせげる。

そういう次第で、注文あり次第引きうけているうちに、四月度においてはそれが八回に達した。東京ばかりでなく、関西、東北地方あたりまでまわって、運動不足解消には効果があったとして、これに馴れたらいけないな、と気がついた。原稿紙のマス目を埋めるよりも、はるかに楽にゼニがかせげる。しかしこれはモノ書きの堕落。ゼニが欲しければ別の人生を歩いたはずである。

そういうわけで、今度の旅の目的の一つに歩くことがあった。それがスタート

のウィーンで早くも一万歩近いとは、じつに五十日分をいっきょに達成したことになるわけだ。

今度の旅は、ウィーンを起点としている。ところが日本からの直航便はなくて、モスクワ経由、北極回り、南回りの三ルートのどれかを選ばねばならない。そして北極回りの場合ならば、乗換える空港としてフランクフルト、アムステルダム、ハンブルク、コペンハーゲン、パリ、ロンドンと六個所ある。

私は北極回りで、今度はロンドン経由ということになったが、いやな予感をおさえきれなかった。それは七年前、この逆のコースで日本に帰ろうとして、ロンドン空港でひどい目にあったからだ。その日はちょうどポーターなどのストライキとぶつかったのである。

世界中の飛行機が、ほとんど絶え間なく離着陸しているが、旅客はみな、重い荷物を自分で運んで搭乗し、あるいは市内に向わねばならない。

この空港は福岡空港の数十倍はあるだろう。トランジット（通過客）のわれわれは、いったんトランクを手にして外に出、それから搭乗手続をするターミナルまでバスで行かねばならぬのに、そのバスがなかなかやってこない。やっとくると、わっと人びとが押しかける。

人も車も、収拾のつかない無秩序の中でうごめいていた。阿鼻叫喚とはオーバーな表現になる。しかし、いつもは悟り澄ました紳士、すまし返った淑女であるはずの白人たちが、血走った眼を吊り上げ、どなり、わめき、押し、押し返し、割り込み、つきとばしながら、自分の荷物だけを確保し、他人より先にいこうとする。

ワーンという音響の中で、老人、婦人、子供をかまう人はいなかった。ラグビーのスクラムに近く、キリスト教の愛、礼儀、ヒューマニティーなどは、かけらもなかった。

ロンドン経由なので、このときのニガイ思い出が脳裏にあった。そして、矛盾する二つのことを考えていた。

二十五歳のせがれのためには、一度はこういう体験もいいな、とおもう。エチケットだの、ゼントルマンシップなどといっていても、いざというときいかにハカなく、頼りないものかということを目撃し、実感しておくといい。そして、混乱の中で老いたる両親をかばいながら大汗をかくということは、生涯忘れられぬ何かを心に刻みつけることになるだろう。

そうおもう一方、還暦を迎えた老妻を、あの中でもみくちゃにするのは可哀想だとおもった。第一私自身、あのときの元気はない。五十六歳と六十三歳の肉体的条件、落差というものはじつに大きい。

しかし、この事故の不安は、単なる杞憂におわった。空港には秩序があった。私たち親子は、ウィーン方面行のゲート近くまでかなりの道を歩き、バーの椅子で出発時間を待つことにした。

ロンドン着が七時、ロンドン発が十時。私はためらうことなくワインをのみはじめたが、これには理由があったのである。

今年の五月、女房は還暦を迎えた。人間年をとるのは当たり前だとしても、自分の女房が還暦になったということは、世の亭主族にとってサムシングであるはずである。

五月三日ドンタクの日、旧制福岡高校の創立六十周年記念祭があったので、久久に福岡にいき、なつかしい友人たちと会った。その一人、福岡県議会副議長で、会社社長で、すぐれた文筆家でもある村谷正隆君とそのことを話しあったが、

「とにかく大事にしてやりましょうよ」

ということで意見が一致した。何かお祝をしてやりたいがというと、

「ヨーロッパの花を見たいとおもいます」

と女房はいう。

ヨーロッパには、すでに二回つれていっている。第一回目のことは『ヨーロッパ旧婚旅行』（中公文庫）という本にしているが、三年前の夏、一カ月間の旅であ

った。二回目は一昨年の初冬で二週間。そこで今度花のシーズンを選ぶとはまことにもっともな希望だが、それにしてもあの飛行機恐怖症が、よくもここまで変わったなと、少々おかしくもある。

「花は結構だが、どことどこに行きたい？」

「ウィーンからチロル方面はどうでしょうか？」

「うん、よかろう」

と私は賛成したものの、じつはこのとき、ウィーンという地名から〈ワイン〉を連想した。福高時代に見た映画「会議は踊る」で「ヴィーン・イン・デル・ヴァイン」と唄った楽士の声は、今なお耳に残っているのだ。

女房は花をたのしむ。それならば亭主の方は「花より団子」ならぬ「花よりワイン」をたのしんでもよいだろう、とおもった。

だがそうなると、女房一人では心もとない。三男坊をつれていき、ボディー・ガード役、勘定役、そしてあちこちの花や居酒屋（ホイリゲ）などを写させるの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com